

☆年間第14主日(7月3日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読 (イザヤの預言 66章 10-14節)

エルサレムと共に喜び祝い、  
彼女のゆえに喜び躍れ、を愛するすべての人よ。  
彼女と共に喜び楽しめ、彼女のために喪に服していたすべての人よ。  
彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り  
豊かな乳房に養われ、喜びを得よ。  
主はこう言われる。  
見よ、わたしは彼女に向けよう  
平和を大河のように。  
国々の栄えを洪水の流れのように。  
あなたたちは乳房に養われ、抱いて運ばれ、膝の上であやされる。  
母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。  
エルサレムであなたたちは慰めを受ける。  
これを見て、あなたたちの心は喜び楽しみ、  
あなたたちの骨は青草のように育つ。  
主の御手は僕たちと共にあることがこうして示される。

### 第二朗読 (使徒パウロのガラテヤの教会への手紙 6章 14-18節)

皆さん、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほか  
に、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたし  
に対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。割礼の有無  
は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。このような原理に  
従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがある  
ように。これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、  
イエスの焼き印を身に受けているのです。兄弟たち、わたしたちの主イエス・  
キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

## 福音朗読（ルカ 10 章 1-20 節）

そのとき、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に関心なさい。行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。

## 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

とても暑い危険な暑さが続いています。皆様いかがお過ごしですか。私も日頃は外で庭仕事などをしますが、今日ばかりは部屋に閉じこもっています。暑さがあるだけで体も疲れが出てきます。皆さまもどうぞご自愛ください。

さて、今日の主日のミサでは分裂に悩む世界に神が独り子を遣わされ、平和と一致の道を示してくださったことが祈られています。この祈りの言葉を私たちはどう実践していけるのか考えてみましょう。

### 第一朗読（イザヤの預言 66章 10-14節）

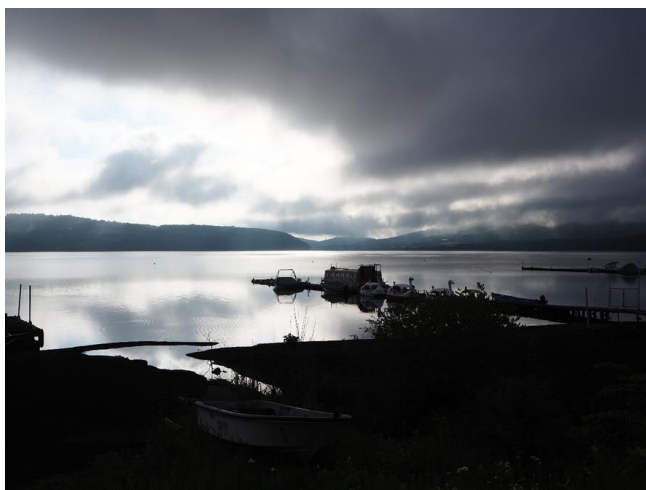
今日読まれるイザヤ書の箇所はイザヤ書の最後の章ですが、将来に訪れるであろうエルサレムの喜びを表現しています。エルサレムの喜びとは神の慰めを受け、神がともにおられることを信じて生きている人々の喜びです。そしてその状況は母と子の愛情の交流に似ているとイザヤは言います。母はおなかを痛めた子をどのようなことがあっても離さない、また忘れないのです。そのように神はイスラエルを忘れないのですとイザヤは語っています。現在の私たちに対しても神は常にともにいてくださるのです。これが私たちの平和なのです。

### 第二朗読（使徒パウロのガラテヤの教会への手紙 6章 14-18節）

私たちキリスト者にとって印とは、十字架です。旧約時代のイスラエルの民はその民に属している印として割礼が施されていました。しかし今はそのような体につけられた印ではなく、新しい生き方、新しく創造されることだとパウロは述べています。十字架の原理に生きていることこそ大事なのです。私たちの生き方が何によって導かれているかが大事なのです。パウロは、自分はキリストの焼き印を身に受けていると言っています。焼き印とは動物が持ち主のしるしを焼いた鉄などでその体に押し当てて、消えない印をつけるものですが、パウロはキリストの焼き印をつけている、すなわち、自分はキリストのもの、キリストの所有物だと言っているのです。私たちは果たしてどんな印を身に着けているのでしょうか。最近は小物の飾りをカバンなどにつけることが多いようですが、私たちの心にいつもくっ付いているものは何でしょうか。つまり心を占領している物事です。ちょっと考えてみましょう。

## 福音朗読（ルカ 10 章 1-20 節）

今日の福音はイエスが弟子たち七十二人を宣教に派遣したことが語られています。いわば宣教活動の実習とでもいえるものでしょう。そして言われます。「収穫は多いが働き手が少ない」（Messis quidem multa, operarii autem pauci）。すなわち救いを求める人々は多いが、救いを知らせる人が圧倒的に少ないと言っているのです。宣教活動上の求人に応募する人が少ないのです。今現代に始まったことではないのです。「だから、収穫のために働き手を送ってくださるように収穫の主に願いなさい」とイエスは言われるのです。つまり働き手が少ないのは、そのための祈りが足りないのだとイエスは言われるのです。つまり働き手の問題ではなく、祈り手の問題なのです。祈り手の存在、それも多くの存在、熱心な祈り手の存在が必要なのです。私たちは神の国の建設に祈りをもって参加しているでしょうか。祈りはどのような人々にも可能です。祈りは宣教活動する人たちのためのエネルギーです。この祈りのエネルギーなしには宣教活動する人たちは生きていけない、つまり神の国は建設されないのです。祈ることは主と共にいることです。神がともにおられる時にそこには真の平和があるのです。



山中湖の朝

P.S.

暑い夏はこれからも続きそうです。お年の方は思った以上に体にダメージを受けます。信者同士に限らず、ご近所さんのお年の方々にぜひ声掛けをしてください。これも立派な愛の行いです。

カトリック足立教会

主任司祭 野口重光